

小波瀾

ЖИТЕЙСКАЯ МЕЛОЧЬ

アントン・チェーホフ Anton Chekhov

青空文庫

ニコライ・イーリイツチ・ベリヤーエフというのはペテルブルグの家作持ちで、競馬氣違いで、そして榮養のいいてらてらした顔の、年の頃三十二ぐらいの若紳士であつた。その彼がある晩のこと、オリガ・イワーノヴナ・イルニナ夫人に逢いに行つた。この女は彼と同棲してゐた、或いは彼自身の表現を借りれば、彼は彼女と退屈な長つたらしいロマンスをひきずつていたのであつた。實際、このロマンスのはなはだ興味があり崇高ですらあつた書き出しの幾ページかは、とつくの昔に読まれてしまったので、今ではなんの珍しいことも面白いこともないページが、だらだらと続いているだけであつた。

あいにくオリガ・イワーノヴナは留守だったので、私たちの主人公は客間の寝椅子ねいすに寝そべって、彼女の帰宅を待ち受けることになった。

「今晚は、ニコライ・イーリイチ！」と男の児この声がした、
「ママはじきに帰って来ますよ。今ソーニャと一緒に仕立て屋さんへ行つたの。」

同じ客間の長椅子の上にオリガ・イワーノヴナの息子でアリョーシャという八つになる児が寝ころがっていた。彼はなかなか綺麗な男の児で、ビロードのジャケットを着て黒の長靴下を穿はいた姿は、まるで絵でも見るようだった。彼は襦子しゅすのクツションの上に寝て、最近にサーカスを見物したとき眼をつけた軽業師の真似まねを

しているらしく、片脚をかわりばんこに上へ蹴り上げていた。やがて上品に出来あがった脚がくたびれてしまうと、こんどは両手を使い出して、猛烈に飛び上がってみたり、四つん這い^ばになって逆立ちの稽古をやり始めた。そんなことをやっている彼の顔つきはとても真剣で、苦しそうに息をはずませたりして、まるで神様がこんなないつときもじつとしていられない身体をお授けになったことを^{うら}怨んでいるように見えた。

「やあ、今晚は、先生」とベリヤーエフは言った、「君だったのか。ちつとも気がつかなかったなあ。お母さんは丈夫かい？」

アリヨーシヤは右手で左足の踵^{かかと}をつまみ、頗^{すこぶ}る不自然な姿勢になったかと思うとくるりと引っくり返り、途端に飛びあがって房

の一ぱいついた大きなランプの笠かさの蔭からベリヤーエフの顔を覗のぞきこんだ。

「さあ何て言うのかなあ？」と少年はちよつと肩を揺すつて答えた、「本当を言うと僕のママはいつだって丈夫じゃないんですよ。ママは女でしょう、ところが女つてものは、ニコライ・イーリイツチ、しよつちゆうどこかしら痛いんですよ。」

ベリヤーエフは手持ち無沙汰ぶさただったので、アリョーシヤの顔を眺めはじめた。彼はオリガ・イワーノヴナと今のような関係になつてから、まだ一度もこの男の児に注意を向けたこともなく、全くその存在を無視していた。男の児は彼の眼の前にいつも姿を見せた。けれど彼は、なぜこの児がいるのか、どんな役目をしてい

るのか、そんなことは考えてみようとも思わなかった。

夕暮れの薄ら明かりに浮かびあがっているアリョーシヤの、蒼^あおじろ^{ひたいまばた}

白い額と瞬きをしない黒い眼を持った顔は、不意にベリヤーエフに、ロマンスの最初の頃のオリガ・イワーノヴナを思い出させた。そこで彼は、その児をかわいがってやろうという気になった。「さあ先生、ここへお出^いで」と彼は言った、「ひとつ小父^{おじ}さんにもつと近い所で顔を見せておくれ。」

少年は長椅子から一足飛びに跳^とび下りて、ベリヤーエフの方へ駈^かけ寄った。

「そこで」と、少年の瘠^やせた肩に手を掛けて、ニコライ・イーリイチは始めた、「どうだね、元気かい？」

「さあ何て言うのかなあ？　前の方がもつとよかったなあ。」

「ふむ、どうして？」

「わけは簡単なんですよ。前にはソーニヤと一緒に唱歌と読み方をやってればよかったんでしょう？　ところがこんどはフランス語の詩を暗誦あんしようするんですもの。小父さんこの頃お髻ひげを刈ったんでしょう？」

「ああ、この間さ。」

「そうだと思ったんだ。お髻がちやあんと短くなってますもの。ちよつと触らせてみせてよ。……こうやって痛かない？」

「いいや、痛くなんかないさ。」

「なぜ一本きり引つ張ると痛くつて、沢山たくさんいっぺんに引つ張る

とちつとも痛くないの？　ふうん。——でも小父さんは頬髯がな
いからおかしいなあ。ここんところから剃そつちまつて、それから
横つちよのここんところは残しとくんですよ。……」

少年はベリヤーエフの頸くびつ玉たまに巻きついて来て、彼の時計くさりの鎖
をいじりはじめた。

「僕は中学生になったら」と彼は言った、「ママに時計を買つて
貰もらうの。僕もこんな鎖にして貰おうや。……やあ、素敵なメダル
だなあ！　パパのもちょうど同じようなんだけど、小父さんの
ほらここんとこに条すじがあるでしょう？　パパのは字がはいってる
の。……まん中んところにはママの写真が入れたるんですよ。パパ
の今の鎖は違うんですよ。環わのじやなくつて、リボンなの。……」

「どうして知ってるの？ 君パパに会ったの？」

「僕？ ううん、……違うの。僕……」

アリヨシヤは紅あかくなった。嘘うそを見つけられたのですっかり困ってしまつて、メダルを爪で一生懸命に引つ掻きはじめた。ベリヤーエフはじつと少年の顔を見詰めていたが、やがて訊たずねた。

「パパに会うんだろう？」

「ううん、……違うの。……」

「いけない、本当のことをお言い、嘘をついちやいけないよ。……君の顔にちゃんと嘘ですつて書いてあるのさ。一ぺん言い出したんだから、もうごまかしても駄目なんだよ。さ、言つて御覽、会うんだろう？ さ、小父さんと仲好なかよしになろう。」

アリョーシヤはもじもじしていた。

「でも小父さん、ママに言わない？」と少年が訊^きいた。

「そんなことないさ。」

「ほんとに？」

「ああ、ほんとさ。」

「小父さん、誓^{ちか}うの？」

「やれやれ、困った坊ちゃんだね。この小父さんを何だと思つて
るの？」

アリョーシヤはあたりを見廻^{みまわ}した。それから眼をととても大きく
して、彼の耳にささやいた。

「ただお願いですからママに言わないでね。……誰にも言わない

でね、秘密なんだから。もしこれがママに知れたら、僕もソーニヤもペラゲーヤも酷い目に逢わされるんだから。……じゃ、僕言いますよ。僕とソーニヤは毎週火曜と金曜にパパに会うんです。夕飯の前にペラゲーヤが僕たちを散歩に連れて出ると、僕たちはアプフェル喫茶店へ行くんです。するともうパパがそこで待ってるの。……パパはいつも仕切りのついた部屋に坐ってるの。あすこには大理石の素敵なテーブルや、背中のない鷺鳥の恰好をした灰皿があるんですよ。……」

「それから何をするの？」

「何もしないの。はじめに今日はを言つて、それからみんなでテーブルの廻りに坐ると、パパは僕たちにコーヒーやパイを御馳ごち

走^{そう}してくれるの。ソーニヤは肉のはいったパイを食べるでしょう。けど僕は肉のはいったのは大嫌いな。僕はキャベツや卵のが好きなんです。僕たちうんと食べちまうものだから、後で夕御飯のときママに見つかからないように、一生懸命たくさん食べるんです。

「それから何の話をするの？」

「パパと？ 色んなことを話すの。パパは僕たちをキッスして、抱きしめて、色んなとても滑稽な話をしてくれるの。それからこうも言うの、お前たちが大きくなったら引き取ってやるぞ、って。ソーニヤは厭^{いや}だ^いって言うけど、僕は賛成なの。そりやママがいないと淋^{さび}しいけど、僕その代り手紙を書きますよ。それよりか、お

休みの日にママの家へお客様に行ってもいいじゃない？——ね、
そうでしょう？ パパは僕に馬を買ってやるって言うの。パパつ
てとてもいい人ですよ。なぜママが別々に住んで、逢ってはいけ
ないって言うのか僕解^{わか}らないなあ。パパはとてもママが好きなん
ですよ。会うたんびに、ママは丈夫かい、何をしてるね、って訊
くんですもの。ママが病気だつて言うのと、パパはこうこんなにし
て両手で頭を抱えて……それから、そこらじゅう歩き廻るんです。
いつでも僕たちに、ママの言うことをきくんだぞ、大事にするん
だぞって頼むの。ねえ、小父さん、僕たち不幸せなんでしょう？」
「ふむ……なぜそう思うの？」

「パパがそう言うの。お前たちは不幸せな子供だなあ、って言う

の。それを聞くと僕ぞつとするんです。お前たちも不幸せだ、俺も不幸せだ、ママも不幸せだ、つて言うの。それから、さあ神様にお前たちのこともママのこともよくお願いおし、つて。」

アリョーシャは鳥の剥製はくせいをじつと見詰めて、そのまま考えこんでしまった。

「そうか……」とベリヤーエフはつぶやいた、「そうか、そんな風にやっていたんだね。喫茶店で会議をやっていたのか。で、ママは知らないの？」

「そりや、知りやしません。……どうして分かるもんですか。ペラゲーヤはどうしたつて言いつこはないし。一昨日おとといパパは梨なしを御馳走してくれましたよ。とても甘くつて、ジャムみたいの！ 僕

「二つも食べちゃった。」

「ふむ、……で、何かね、……ねえ、パパはこの小父さんのことは何にも言わないの？」

「小父さんのこと？ さあ何て言ったらいいのかなあ。」

アリョーシャは探るような眼つきでベリヤーエフの顔をちらと見て、ちよつと肩を揺すつた。

「何にも変わったことなんか言やしませんよ。」

「じゃ例えば、どう言うの？」

「悪口は言わないの。だけど、つまり……小父さんのことをおこ憤つてゐるの。ママが不幸せになつたのは小父さんのお蔭だつて言うの。それから、小父さんが……ママを駄目にした、つて。ねえ、パパ

って変な人じゃない？ 小父さんはいい人で、一度だってママを叱^{しか}つたことなんかない、って僕言^いつてやるんだけど、パパは頭^はばっかり振^ふっているんですもの。」

「すると、この小父さんがママを駄目にした^つて言うんだね？」

「そうなの。憤^いらないでね、ニコライ・イーリイツチ。」

ベリヤーエフは起^たちあがった。暫^{しば}くじつと立^たっていたが、やがて部屋の中を歩き廻^{まわ}りはじめた。

「こりや全く奇妙な話だ……おかしな話だ」と彼は肩を揺すり皮肉な笑いを浮かべながら呟^{つぶや}くように言^いった、

「自分がぴんからきりまで悪いくせに、この俺が駄目にしただつて？ 大した無垢^{むく}の子羊があつたもんだ！ じゃ、つまり、この

俺がお母さんを駄目にした、つてそうお前に言うんだね？」

「そうなの、けど……ねえ、小父さん憤らないつて言つたじやありませんか？」

「俺は憤りはしないさ。……それに、とに角お前の知つたことじやない。いやはや、……まるでこれは大笑いだ。この俺はまるで、鶏が味噌汁の中に跳びこんだような態^{やま}だ。おまけに罪は俺にあるんだそうだ。」

ベルの鳴るのが聞こえた。少年は席を飛び立つたかと思うと、駈け出して出て行つてしまった。一分間ののち、一人の婦人が小さな女の児^こを連れて客間にはいつて来た。これがアリョーシヤの母親のオリガ・イワーノヴナであつた。アリョーシヤも彼等の後

から、両手を振って大声に歌をうたいながら、ぴよんぴよん跳ねてついて来た。ベリヤーエフはちよつとうなずいたまま、また部屋を行ったり来たりしつづけた。

「そりや勿論、もちろん文句の持つて行きどころはこの俺より外にはないからな」と彼は鼻をくくん言わせながら呟いた、「あの男の言うのは本当さ。あの男はなるほど侮辱を受けた亭主にはちがいないさ。」

「それ、何のお話なの？」とオリガ・イワーノヴナは訊ねた。

「何の話だつて？ まあ、おきき。おまえの御亭主がとんでもない話をふれ歩いてるんだよ。この俺は大変な恥知らずの悪漢にされちまったのさ。この俺がおまえや子供たちを駄目にしたんだと

さ。おまえたちはみんな不幸せで、俺だけが恐ろしく幸福なんだ。恐ろしく、まるで幸福なんだ！」

「私には何のことやら分かりませんわ、ニコライ。いったい何ですの？」

「じゃ、あの小つぽけな紳士に訊いて御覧」とベリヤーエフはアリヨシヤを指さして言つた。

アリヨシヤは真紅な顔まっかになつた。それから急に蒼ざあおめて行つた。顔じゆうが恐怖のために歪ゆがんでいた。

「ニコライ・イーリイツチ」と彼は鋭くささやいた、「シツ。」

オリガ・イワーノヴナは呆れ顔あきがおでアリヨシヤを眺め、ベリヤーエフを眺め、それからまたアリヨシヤを見た。

「訊いて御覧つたら！」とベリヤーエフはつづけた、「おまえの所のペラゲーヤは大変な引きずり女だぞ。子供たちを喫茶店へ引っ張って行って、パパさんに面会させるんだ。だがそのことじゃない。問題は、パパさんが受難者で、この俺が悪者でならず者で、おまえたち二人の生活を滅茶滅茶にめちやめちやしちまつたんだ。……」

「ニコライ・イーリイツチ！」とアリョーシヤは呻うめいた、「約束したじゃないの！」

「ええ、黙つてろ！」とベリヤーエフは手を打ち振った、「これは約束なんぞより大事なことなんだ。俺は偽善は我慢できん、嘘は。」

「ちつとも分かりませんわ」とオリガ・イワーノヴナは言った。

その眼に涙がきらきらした、「ねえ、リヨーニカ」と彼女は眸を息子の方へ向けて、「お前はお父さんにお会いなの？」

アリヨーシヤには母親の声は聞こえなかった。彼は恐ろしそうな顔でベリヤーエフを見詰めていた。

「そんなことがあるものですか！」と母親は言った、「ペラゲーヤに訊いてみましょう。」

オリガ・イワーノヴナは部屋を出て行つた。

「ねえ、小父さんは約束したじゃないの！」とアリヨーシヤは身体じゅうを顫^{ふる}わしながら言つた。

ベリヤーエフは少年に手を振つて、やはり歩き廻っていた。彼は自分の受けた恥辱のことばかりに心を奪われていたので、また

元通りに少年の存在を忘れていた。この大きな真面目な男は子供の
ことなんぞ構ってはいられなかったのであった。

アリヨシヤは部屋の隅の方に坐つて、いかにも恐ろしくて堪
らない様子で、自分が瞞だまされた次第をソーニヤに物語っていた。
彼はぶるぶると身顫いがとまらないで、吃どもつたり泣いたりした。
こんな粗あら々しい仕方では嘘と顔を突き合わせたのは生まれてはじ
めてであつた。甘い梨や、パイや、高い時計やのほかにも、この
世の中にはまだ別の色々な事のあることを、彼はこれまで知らず
にいたのであつた。したがってそれに附ける名が子供の言葉には
ないのであつた。

(Ж и т е й с к а я м е л о ч ь, 1886)

青空文庫情報

底本：「カシタンカ・ねむい 他七篇」岩波文庫、岩波書店

2008（平成20）年5月16日第1刷発行

2008（平成20）年6月25日第2刷発行

底本の親本：「チエーホフ全集 第五卷」中央公論社

1960（昭和35）年発行

入力：米田

校正：noriko saito

2010年7月5日作成

2012年2月21日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

小波瀾

ЖИТЕЙСКАЯ МЕЛОЧЬ

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 アントン・チェーホフ Anton Chekhov
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks
青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>